

## ガイダンス

- 第1回 9月29日(木)ガイダンス・川島真  
川島真(東京大学)「世界秩序の中の中国—習近平政権の対外政策」
- 第2回 10月6日(木)高原明生(東京大学)「習近平政権下の中国政治」
- 第3回 10月13日(木)薛劍(在日本中国大使館公使参事官)  
「中日関係の明るい未来を創るために何が求められるか」
- 第4回 10月20日(木)梶谷懐(神戸大学)「中国経済の行方(1)」
- 第5回 10月27日(木)丸川知雄(東京大学)「中国経済の行方(2)」
- 第6回 11月8日(火)阿古智子(東京大学)「中国社会の現状と課題(1)」
- 第7回 11月10日(木)沈建国(在日本中国大使館政治部参事官)「中国社会における中国共産党」

- 第8回 11月28日(月)富坂聰(拓殖大学)「中国社会の現状と課題(2)」
- 第9回 12月1日(木)村田雄二郎(東京大学)「歴史認識と歴史研究」
- 第10回 12月8日(木)景春海 (在日本中国大使館商務部参事官)  
「中日経済貿易協力の現状と展望」
- 第11回 12月15日(木)鈴木賢(明治大学)「中国法の仕組みと社会」
- 第12回 12月22日(木)園田茂人(東京大学)  
「中国社会をいかに捉えるのか」
- 第13回 1月5日(木)予備日

## 習近平政権への評価 とその分岐

川島 真

## 習近平政権への疑問点

- 習近平政権に対する評価の変遷と分岐
  - 1) アメリカ: 2014年までは、習近平政権を高く評価。権力集中、強力な指導力。世界秩序にも柔軟に対応するという評価。J.Baderの議論など。ところが、2015年になると、元NSCのメディーロスらの議論が歯切れの悪いものに。そして、中国の分析よりも、中国への対応そのものを議論するように。中国をいかにshapeするかということ、またcost impositionなどが中国への対応として主流の議論になる。
  - 2) 日本: 基本的に習近平政権に対する疑義。特に日本政府から民主活動家、ジャーナリストなどを招聘。ただし、習近平政権の対日強硬外交などによって、過度に中国を批判する論調も。

## 習近平評価の分岐

- 学界でも、習近平評価は大きく分岐。アメリカの学界は、2015年あたりから大きく転換。その象徴がシャンボー教授。しかし、実証研究の成果というよりも評価が大きく変わったという印象。
- 日本の学界は、習近平政権そのものの事績とともに、中央-地方関係、国家-社会関係に焦点。アメリカは中央の言説や、中央の権力政治で中国を分析する傾向。習近平政権は権力政治の面では比較的成功裏に権力の集中をおこなっており、この面だけ見れば肯定的な評価になる。

## 中国の政治体制への見方

1. 開発独裁政権としての共産党政権
  - 歴史上の屈辱、共産党神話・豊かさの確保。経済発展のためには政治的な安定が不可欠。そのためには、民主化の抑制はやむを得ない、という考え方。中国の知識人に広まっている解釈。
2. 状況に柔軟に適應する共産党政権
  - 中国の権威主義体制は制度化を通じてますます柔軟性のある安定したものになっているとか(Nathan)、中国共産党は果敢なる改革と「適應(adaptation)」を継続して活力を得ているという指摘も(Shambaugh)。

## 中国の政治体制への見方

3. 中国共産党が社会から支持される背景。
  - 江沢民による「三つの代表」など、共産党は階級政党からエリート政党へと転換。
  - 中国共産党は、まさに「包摂(cooptation)」や「コーポラティズム(corporatism)」を利用しながら、1990年代から社会の諸集団への関与、統制管理を強化して、反対勢力になることを防ぎつつ、社会エリート、企業家などを共産党に包摂してきた(Dickson)。また、中には経済発展にともなって活性化する市民社会をむしろ組み込みながら統治を改良しているという見方もある。これは、「諮問的権威主義(consultative authoritarianism)」などと言われる(Teets)。

## 中国の政治体制への見方

4. しかし、開発独裁を継続するにしても、経済発展に限界が見られ始めている。また、社会との対話、柔軟性が次第に失われている？ 反腐敗、活動家の逮捕や取り締まりは、そうした柔軟性の喪失では？
  - 党内の派閥闘争、抵抗勢力の動きによって改革の遅滞など、一党支配体制の脆弱性を過小評価していると、これまでの柔軟性論への批判も(Li)。
  - 2015年3月6日、WSJ, The Coming Chinese Crackup (シャンボー教授): We cannot predict when Chinese communism will collapse, but it is hard not to conclude that we are witnessing its final phase. The CCP is the world's second-longest ruling regime (behind only North Korea), and no party can rule forever. Looking ahead, China-watchers should keep their eyes on the regime's instruments of control and on those assigned to use those instruments. Large numbers of citizens and party members alike are already voting with their feet and leaving the country or displaying their insincerity by pretending to comply with party dictates.

## バリー・ブザン教授の中国論

- Confusing Public Diplomacy and Soft Power(2016年3月10日)
  - The problem for China is threefold: 1) China's government does not in itself have a good image to sell abroad; 2) the Chinese government appears to be afraid of the civil society that its highly successful economic reforms have created; and 3) because of its totalitarian traditions, it does not know how to get out of the way.
  - 1) 民主主義に対し強く反対し強力な権威主義的統治をしている。2) 中国政府は国民を恐れている。これは、中国政府が市民社会を弾圧し、国内治安を重視していることから分かる。3) 中国政府は、どのようにすれば市民社会の「邪魔をしない」かが分かっていない。

## 習近平政権の政策

- 習近平政権が直面している二つのゲーム
  - 1) 中央における権力政治 2) 国家-社会、中央-地方
- 中央の権力政治での政策
  - 1) 権力集中の動き、2) 反腐敗防止、3) 軍の管理
- 国家-社会、中央-地方
  - 1) ナショナリズム(中国の夢?)、2) 経済成長、3) 監視・統制強化

## 習近平体制の対外政策①

- 発展途上大国として
- 社会主義国として
- 被害者として(国権回収物語)
- 同盟国不在の中国
- 国家主権重視

## 習近平政権の対外政策①

- 21世紀の中国外交の変容
- 1) 韜光養晦: 江沢民期に採用された鄧小平の言葉。
  - 最終的には、経済を重視した協調外交という意味。
- 2) 2005年、胡錦濤による国連「和諧外交」。ここがピーク。
- 2006-2008年、政策の調整期に。「堅持韜光養晦、積極有所作為」。
- 2009年以降は大きく転換。主権、安全保障重視に。

## 習近平政権の対外政策①

- 胡錦濤政権：最後まで韜光養晦政策を堅持。
- 2012年、習近平・李克強政権の成立。以後、一度も韜光養晦使用せず。
- → 中国型の国際秩序？
- 集団指導体制よりも習近平に集中する権力。
- → 国内政治と対外政策の連続性。多くの利益団体。複雑性。
- → 世論との関係性。
- 極めて強い経済力。経済力を利用した外交。

## 習近平政権の対外政策②

- 《世界秩序と中国》：中国は世界秩序への貢献者なのか
- \* 空間的理解
- 1) グローバルな空間での協調。
- 2) 中国の周辺領域での強硬外交。
- \* 分野的理解
- 1) 中国にとって有利な枠組み：NPT体制、六者協議など
- 2) 中国にとっては有利な面もあるが、修正が必要：経済、金融
- 3) 中国にとって不利：環境など
- 4) 中国に無関係

## 習近平政権の対外政策③

- アメリカとの「新型大国間関係」
- 大国外交、周辺外交、途上国外交、マルチ外交
- 周辺外交における新たな試み
- 強硬な主権・安全保障問題 + 大国中国としての振る舞い
- 国際公共財の提供
- 秩序イメージの提供

## 東アジアと日本の立ち位置

- 中国の存在の大きさ
- → 経済を中心とした協力と、二国間関係としての安保？
- → ASEAN中心性の維持と可能性
- 南シナ海問題の衝撃、アメリカの関与
- 日本の特殊性
- 日中関係